

最澄の上表文と唐僧玄奘

佐伯有清

一

最近刊行された湯淺泰雄氏の力作『玄奘三蔵——はるかなる求法の旅——』の第七章「長安城」において、湯淺氏は、顯慶二年（六五七）九月二十日、玄奘が唐の皇帝高宗に宛てて上表した「請_レ入_二高岳_一表」の大意を掲げ、玄奘の思いと最澄の志とを次のように説いている。

この上表文は、晩年の玄奘の思いをよく語っている。特に、修行に励みたいというくだりにその思いがにじみ出ている。唯識哲学は修行の心理学である。日本の

留学僧道昭に対して彼が教えたのもこのことであつた。この玄奘の上表文は日本でもよく知られており、最澄の名著『顯戒論』にも引用されている。比叡山を修行の道場にしたいという彼の志は、この玄奘の思いに心を動かされたところがある¹⁾。

湯淺氏が玄奘の上表文で晩年の玄奘の思いが、とくににじみ出ているとした「修行に励みたいというくだり」は、湯淺氏が玄奘の上表文を現代語訳した次のくだりである。

学問（慧_え学_{がく}）は経典・論書の研究であり、修行（定_{じやう}学_{がく}）は山林の中で坐禅瞑想することであり、玄奘は少年のころから研究の方は重ねてきましたが、修行の方

は十分やる機会がありませんでした。今は修行にはげみ、自分の心とたましいを高めることを望んでおります。これは山中に入らなくてはできません。この国の高山少林寺は名山として知られる聖なる山であります。ここは菩提流支三蔵が訳経されたゆかりの場所です。ここに住んで修行したく思います⁽²⁾。

この湯浅氏による巧みな大意の箇所を玄奘の「請入嵩岳表」の原文についてみると、

如^レ研^二味^一経論^三慧学也。依^レ林宴坐定学也。玄奘少来
頗得^レ專^二精教義^一。唯於^二四^一禪九定^三。未^レ暇^二安心^一。今願
託^二慮禪門^一。澄^二心定水^一。制^二情^一猿之逸躁。繫^二意象之奔
馳^一。若下^レ斂^二迹山中^一不^レ可^二成就^一。竊承此州嵩高少室。
嶺嶂重疊峯澗多寄。含^二孕風雲^一包^二蘊仁智^一。果葉豐茂
蘿薛清虛。実海内之名山。域中之神岳。其間復有^二少
林伽藍閑居寺等^一。皆跨^二枕巖壑^一繫^二帶林泉^一。仏事尊嚴
房宇閑邃。即後魏三蔵菩提留支訳経之處也。実可^二依
帰以修^二禪觀^一⁽³⁾。

と云っている。
ところで湯浅氏は、「この玄奘の上表文は日本でもよく知られており、最澄の名著『顯戒論』にも引用されている」⁽⁴⁾

と述べているが、実は、玄奘のこの上表文に該当する箇所が、『顯戒論』にそのまま引用されているわけではない。

最澄は、『顯戒論』巻下、「開下示蘭若修^二学第一義諦六波羅蜜^一明^二擲上四十八^一」において、『大集^{だじゅう}月蔵^{がつそう}經』第一の經文を引用し、「明知。第一義六度。坐^二臥山林中^一。一切起^レ念時。悉令^二円満^一也」(この文から明らかに知られる。最高のさとりに基づく、出世間の六波羅蜜の行は、山林の中に生活して、あらゆるおもいを起すときに完全なものにしていくことができるのである)⁽⁵⁾と述べ、そして「釈迦^{しやくか}真經。重^二讚蘭若^一。玄奘入^レ山。良有^二所以^一也。求真^二釈子^一。誰不^レ慕^二山哉^一(釈迦の真実の經典は、阿蘭若を重ねて讚めたたえている。そこで玄奘が山に入ろうとしたのには、本当に理由のあることである。真実を求める仏子であれば、誰がいったい山を慕わないであろうか)」と説いている。

最澄の右の記述のうち、「玄奘入^レ山」のところが、玄奘の「請^レ入^二嵩岳^一表」において玄奘が山中に入り、さらに修行したいという思いを述べたところに相当するのである。したがって湯浅氏が、「この玄奘の上表文は……最澄の名著『顯戒論』にも引用されている」と記しているのは、かならずしも正確な説明であるとはいえない。

このように、最澄の主著『顯戒論』では、玄奘の上表文をそのまま引用しているわけではないが、他方、最澄は、不空の表制文を『顯戒論』に三箇所⁽⁷⁾にわたって引用している。すなわち『顯戒論』巻中、「開下示大唐文殊為三上座新制明扼上十六」に、「謹案。代宗朝。贈司空大辯正広智三藏和上表制集第二云。天下寺食堂中。置文殊上座制一首」⁽⁸⁾として、その表制文の全文を引用し、また巻下、「開下示大唐臺山安百僧等度人抽僧明扼上四十五」に、「謹案。代宗朝。贈司空大辯正広智三藏和上表制集第二云。請臺山五寺度人抽僧制一首」⁽⁹⁾として、同じくその全文を引き、さらに同巻、「開下示大唐貢名出家不欺府官明扼上五十一」に、「謹案。代宗朝。贈司空大辯正広智三藏和上表制集第一卷云。降誕日。請度七僧。祠部勅牒一首」⁽¹⁰⁾として、同様にその全文を引用し、加えて「又集第二卷云。請降誕日。度僧五人制一首」⁽¹¹⁾、および「請度下掃灑先師龍門塔所一僧上制一首」⁽¹²⁾をも、あわせて掲げている。

つまり最澄は、『顯戒論』に、長安西明寺の円照が撰集した『代宗朝贈司空大辯正広智三藏和上表制集』の巻第一から一首、および巻第二から四首の表制文を引用して、自己の論を展開しているのである。これによって最澄が、い

かに『代宗朝贈司空大辯正広智三藏和上表制集』を繙読し、活用していたかが、うかがえるのである。不空の表制文や玄奘の上表文が、最澄の上表文に利用されている可能性が、これによって推測できるのであるが、以下、最澄と同時代の僧が玄奘の上表文を利用したこととあわせて、最澄の上表文の典拠の問題の一端を明らかにしてみることしよう。

二

最澄の伝記で最古の『叡山大師伝』には、著名な願文とともに、いくつかの上表文が掲げられている。それらを年代順にあげてみると次のとおりである。

- (一) 延暦二十一年(八〇二) 九月七日の上表文。
- (二) 延暦二十一年(八〇二) 九月十三日の謝表。
- (三) 延暦二十一年(八〇二) 十月二十日の上表文。
- (四) 延暦二十四年(八〇五) 八月二十七日(実は同年七月十五日)の上表文。
- (五) 延暦二十五年(八〇六) 正月三日の上表文。
- (六) 弘仁十年(八一九) 三月十五日の上表文。

(七)弘仁十一年(八二〇)二月二十九日の上表文。

(一)の最澄の上表文は、桓武天皇が、「思_下欲興隆靈山高跡。建_中立天台之妙悟上。詔問和祭酒。祭酒告_上和上。和上与祭酒。終日与議弘法之道」(叡山大師伝)した結果、最澄が天台の教えをひろめるためには、天台の僧を留学僧・還学僧として各一人唐へ派遣して天台宗を学ばせる必要のあることを要請したものである。

この上表文は、

沙門最澄言。最澄早預_二玄門_一。幸遇_二昌運_一。希聞至道。遊_二心法苑_一。每恨法華深旨。尚未_二詳釈_一。

という文で書き起こされている。一方、玄奘には、「請_二太宗文皇帝作_二經序并題經表_一」という上表文があるが、その冒頭の文は、次のようになっている。

沙門玄奘言。名(玄奘)早預_二玄門_一。幸逢_二昌運_一。希聞至道。遊_二心法苑_一。每恨正覺遺文。尚未_二詳備_一。

玄奘のこの上表文の書き出しは、最澄の(一)の上表文の文章と、ほとんど同じであることが知られ、最澄は、明らかに玄奘の右の上表文を下敷きにして書いたものであった。さらにこのことを一段と明確にするのは、玄奘の同上表文に、

所_レ望天文秘思。与_二日月_一齊_レ明。玉字銀鉤。将_二乾坤_一等_レ固。庶百代之下。歌詠無_レ窮。千載之外。瞻仰無_レ絶。不_レ任_二偉偉之至_一。謹奉_レ表以聞。輕触_二天威_一。伏增_二悚汗_一。謹言。

とある結びの文言である。(一)の最澄の上表文に、

所_レ望法華円宗。与_二日月_一齊_レ明。天台妙記。将_二乾坤_一等_レ固。庶百代之下。歌詠無_レ窮。千載之外。瞻仰無_レ絶。不_レ任_二悽々之至_一。謹奉_レ表以聞。

とあるのをみれば、最澄が(一)の上表文を書くのにあたって、全面的に玄奘の「請_二太宗文皇帝作_二經序并題經表_一」に依拠したことは疑いない。ちなみに玄奘の上表文の結びの箇所は、彦悰撰述の『大唐大慈恩寺三藏法師伝』巻第六に、
冀冲言奥旨。与_二日月_一齊_レ明。玉字銀鉤。将_二乾坤_一等_レ固。使_二百代之下_一。誦詠不_レ窮。千載之外。瞻仰為_レ絶。というかたちで記述されている。

次に最澄の上表文で、玄奘の上表文を拠りどころとしているのは、(四)の上表文である。この上表文は、最澄が唐から帰国して、唐より将来した金字の『法華經』七巻、『金剛般若經』一卷などを桓武天皇に奉献した時ものであるが、最澄は、その上表文を次のような文で書きはじめている。

沙門最澄言。最澄聞。六爻探レ蹟。局ニ於生滅之場。百物正レ名。未レ涉真如之境。⁽²⁰⁾

この文は、玄奘の「謝太宗文皇帝製三藏聖教序」表の冒頭に、

沙門玄奘言。竊聞。六爻探レ蹟。局ニ於生滅之場。百物正レ名。未レ涉真如之境。⁽²¹⁾

とある文をそのまま用いたものであり、また同じく(四)の上表文に、

伏惟陛下纂レ靈出レ震。撫レ運登レ樞。⁽²²⁾

とあるのは、玄奘の貞観二十年(六四六)七月十三日付の「進経論等」表に、

伏惟陛下纂レ靈出レ震。撫レ運登レ樞。⁽²³⁾

とあるのに拠っており、さらに最澄の上表文に、

最澄奉レ使求レ法。遠尋レ靈跡。往登レ台嶺。躬写レ教迹。所レ獲経并疏及記等。捻二百三十部四百六十卷。且見進経一十卷。名曰「金字妙法蓮華経七卷」。(下略)⁽²⁴⁾

とあるのは、同じく玄奘の「進経論等」表に、

遠尋レ靈跡。往在「西域」。躬習「梵言」。覽「毘尼之奥旨」。窺「多羅之密藏」。所レ獲梵本経論。総一千帙六百五十

七部。佛像七軀。(下略)

とあるのを下敷きにして作文したものである。

なお玄奘の「謝太宗文皇帝製三藏聖教序」表の「沙門玄奘言。竊聞。六爻探レ蹟。局ニ於生滅之場。百物正レ名。未レ涉真如之境」という文は、『大唐大慈恩寺三藏法師伝』巻第六に、「時法師奉聖製」表謝曰。沙門玄奘言。竊聞。六爻探レ蹟。局ニ於生滅之場。百物正レ名。未レ涉真如之境」云々として掲げられている。⁽²⁶⁾

以上のように最澄は、(一)と(四)の上表文を書くのにあたつて、玄奘の「請太宗文皇帝作経序并題経表」、「謝太宗文皇帝製三藏聖教序」表、「進経論等」表などの文章を引き写していることが明らかとなった。

最澄が、『顯戒論』において不空の表制文を円照撰の『代宗朝贈司空大辨正広智三藏和上表制集』巻第一、第二から引用していることは、すでにみてきたところであるが、しからは最澄は上表文においても、不空の表制文を利用してゐるのであろうか。

最澄の上表文(六)は、「請レ立大乘戒表」と称されているものであるが、この上表文に、

伏惟弘仁元聖文武皇帝陛下。徳合「乾坤」。明並「日月」⁽²⁷⁾と記され、ここに嵯峨天皇のことを「弘仁元聖文武皇帝陛

下」と莊重な尊号でもって述べている。

ところで『代宗朝贈司空大辨正広智三藏和上表制集』卷

第二、「天下寺食堂中置文殊上座制一首」には、

伏惟宝応元聖文武皇帝陛下。徳合乾坤。明並日月⁽²⁸⁾。

とあるので、最澄は、この上表文を書くのにあたって、不空のこの表制文の箇所にならったものであることがわかる。ちなみに表制文に記されている「宝応元聖文武皇帝陛下」は、唐の皇帝代宗のことである。なお最澄の自筆本が現存している弘仁九年五月二十一日付の「請菩薩出家表」にも、「弘仁元聖文武皇帝陛下。徳合乾坤。明並日月⁽²⁹⁾」とみえる。嵯峨天皇を「弘仁元聖文武皇帝陛下」という尊号で記しているのは、他書にみえないとされているが、最澄は不空の右の表制文での尊号表記にもとづいて、こうした独自の尊号を新たに作りだしたのである。

この最澄の「請菩薩出家表」には、

故唐表云。制情猿之逸躁。繫意象之奔馳。若不

レ斂迹山中。不レ可成就⁽³¹⁾也。

とあって、「唐表」の文が直接引用されている。この「唐表」は、玄奘の「請入嵩岳表」であって、玄奘が、その上表文で、

制情猿之逸躁。繫意象之奔馳。若不レ斂迹山中。不

レ可成就⁽³²⁾。

と書いていることからして明らかである。この一事によっても、最澄が玄奘の上表文を自家薬籠中のものとしていたかが、はっきりわかる。

三

玄奘の上表文の文言を自己の上表文などに取り入れるのは、ひとり最澄にかぎったことではなかった。

『叡山大師伝』には、延暦二十一年(八〇二)八月二十九日以後に、大安寺の三論宗の僧である善議らが、高雄山寺での講經を聴講し、勅使の口宣を蒙ったのに対して謝表を製したことが記されており、その謝表は、

沙門善議等言。今月廿九日。治部大輔正五位上和氣朝

臣入鹿奉レ宣口勅。聞法華新玄疏講説於山寺。随

喜於一乗。釋侶祇奉慈誥。喜懼交レ懷。凡在緇徒。

不レ勝慶戴⁽³⁴⁾。

という記述にはじまっている。

この文を、玄奘の「謝丁許製大慈恩寺碑文」及得内宰相

助乙詔經^{甲表}」に、

沙門玄奘言。今月廿四日。内給事王君德奉^レ宣口勅。

許^下為^二寺塔^一建^レ碑製^レ文。及遣^下在僕射于志寧。中

書令來濟。礼部尚書許敬宗。黃門侍郎薩元超。杜正倫。

中書侍郎李義府。国子博士范穎等諸學士^中共詔經^上。

觀沢潜^レ流。玄風載^レ闡。祇奉^二慈誥^一。喜懼交^レ懷。凡

在緇徒。不^レ勝^二慶^一。輶⁽³⁵⁾。

とあるのと比べてみると、明らかに善議らの謝表の右の箇

所は、玄奘の謝表にもとづく作文であることが知られる。

また善議らのこの謝表の結びの部分に、

善議等幸逢⁽³⁶⁾休運^一。

とあるのも、玄奘の同謝表に、

玄奘幸逢⁽³⁷⁾休運^一。

とあるのにもとづいたものである。

さらに『叡山大師伝』には、延暦二十一年九月六日、皇太子安殿親王が高雄山寺での法会を随喜し、天台の教迹を尊重すべきことを善議らに伝えたことに對する謝啓を皇太子に差しだしたことが記され、そこに善議らの謝啓の全文が掲げられている。その謝啓は、

沙門善議等啓。中使光臨。伏承^二明令^一。恩問降^二於四教

法筵。随喜奉^二於一乘^一田庭。凡在緇徒。不^レ勝^二慶^一戴⁽³⁸⁾。

恭承^二寵命^一。對越惶悸。竊以至教希夷。理出^二能詮^一之

外。玄章神邈。道闡^二玄象之間^一。顯晦從^レ時。行藏在

レ運。非^レ屬^二淳和之化^一。豈弘^二幽頤之訓^一者哉⁽³⁸⁾。

という文で書き起こされている。

まず善議らの謝啓の「沙門善議等啓。中使光臨。伏承^二明令^一」は、玄奘の「謝^二玄奘法師東宮書述聖記^一啓」に、

沙門玄奘啓。中使光臨。伏承^二明令^一。

とあるのと同文であり、また「凡在緇徒。不^レ勝^二慶^一戴⁽³⁸⁾」は、

上に引用した善議らの謝表にも記されている語句であつて、これは玄奘の「謝^二丁許^一製^二大慈恩寺碑文^一及得^二內宰相助

乙詔經^{甲表}」に、

凡在緇徒。不^レ勝^二慶^一。輶⁽³⁶⁾。

とあるのにもとづいたものであることは、さきにみたとお

りである。

次に、「竊以至教希夷。理出^二能詮之外^一」から「豈弘^二幽

頤之訓者哉」までの文は、玄奘の「皇帝在^二春宮^一日所^レ寫

六門經及題^二菩薩藏經等^一謝啓」に、

竊以至教希夷。理出^二宵寔之外^一。玄章沖邈。道闡^二言象

之間^一。顯晦從^レ時。行藏在^レ運。非^レ屬^二淳和之化^一。豈

弘^二幽頤之訓^一者哉。

とあるのと同文である。

弘_二幽頤之訓_一者_レ故_レ。⁽⁴¹⁾

とあるのにもとづいている。

善議らの謝啓には、つづいて、

伏惟皇太子殿下。德隆_二天地_一。道昭_二円光_一。三_レ靈宅_レ心。

万邦式望_二。⁽⁴²⁾

と記されているが、これも玄奘の右の謝啓に、

伏惟皇太子殿下。德隆_二天地_一。道昭_二円光_一。三_レ靈宅_レ心。

万邦式望_二。⁽⁴³⁾

とあるのに拠っている。さらに善議らの謝啓の結び文は、

斯乃慶集_二皇靈_一。永馭_二金輪之運_一。福滋_二聖善_一。速紹_二王

毫之位_一。善議等。内省_二膚菲_一。覲_二道慶辰_一。生微用浅。

空荷_二采渥_一。不_レ勝_二抃躍之至_一。謹附_二内舍人正六位上紀

朝臣鈴鹿麻呂_一。奉_レ啓陳謝以聞_二。⁽⁴⁴⁾

となっているが、これも同じく玄奘の「皇帝在_二春宮_一」日所

写_二六門経及題_一菩薩藏経等_二謝啓_一」に、

斯乃慶集_二皇靈_一。永馭_二金輪之運_一。福滋_二聖善_一。速紹_二王

毫之位_一。名_二玄奘_一。内省_二膚菲_一。覲_二道慶辰_一。生微用浅。

空荷_二采渥_一。不_レ勝_二抃躍之至_一。謹奉_レ啓陳謝以聞_二。⁽⁴⁵⁾

とあるのと、まったく同文である。

これまでにみてきたように、善議らの謝表、および謝啓

の文は、玄奘の「謝_二許_レ製_一大慈恩寺碑文_一及得_二内宰相助_一」
訳経_甲表_一、「謝_二玄奘法師東宮書述聖記_一啓」、「皇帝在_二春宮_一」
日所_二写_一六門経及題_二菩薩藏経等_一謝啓」などにもとづいて
記述されたものであることが明らかとなった。なかでも善
議らの謝啓は、もっぱら玄奘の「皇帝在_二春宮_一」日所_二写_一六
門経及題_二菩薩藏経等_一謝啓」にもとづいて作文されている
ことが知られたのである。ただし玄奘のこの謝啓の書きだ
しは、

沙門玄奘啓。中使曲臨。光命隆_二渥_一。⁽⁴⁶⁾

となっているのに、善議らの謝啓が、この部分だけを玄奘
の「謝_二玄奘法師東宮書述聖記_一啓」によって、「沙門善議
等啓。中使光臨。伏承_二明令_一」⁽⁴⁷⁾と書き起こしているのは、
下につづく文からみなして適切であり、善議らが、ひろく
玄奘の表啓を集録した『_二寺沙門玄奘上表記_一』（『大唐三蔵玄
奘法師表啓』）などを手もとに置いて、謝啓を書きあげるさ
いの文範としていたことを物語っている。それは最澄にし
ても同様であった。

四

最澄の主著である『顯戒論』巻上の巻頭には、「開レ雲頭レ月篇第一」と題して、護命ら僧綱の上表文に対する最澄の反論が詳細に展開されている。

護命らの上表文が玄奘・義浄らのことにふれて、「玄奘義浄。久経西域」。所レ聞所レ見。具伝漢地」と記しているのに対して、最澄は、

彈曰。玄奘義浄各造記伝。大小別学具載₍₄₈₎兩伝。但披伝文。不_レ案_レ伝義。噫埋玉之歎。豈可_レ得_レ免也。

と批判している。ここで最澄は、玄奘の『大唐西域記』と義浄の『南海寄帰内法伝』に、大乘と小乗とが別々に学ばれていることが記載されていることを指摘しているが、護命らの上表文批判につづく「開_レ示_レ三寺所_レ有_レ国篇第二」において、最澄は、「謹案_レ玄奘三蔵西域伝。有_レ三_レ学_レ国。具列如_レ左₍₄₉₎」として、「第一_レ習_レ学_レ大乘国。略_レ一十五_レ国」、「第二_レ兼_レ学_レ大小_レ国。一十五_レ国」、「第三_レ但_レ学_レ小_レ乘_レ国。四十一_レ国」に区分し、大乘を習学する国、大乘と小乗とを兼学する国、小乗を学ぶ国を、それぞれ玄奘の『大唐西域記』の記事か

ら抜粹している。また「謹案。義浄三蔵南海寄帰内法伝第一云」として、最澄は同伝から「大乘小乗。区分不_レ決定。北天南海之郡。純是小乘。神州赤県之郷。意存大乘。自余諸処。大小雜行」という記述を引用して、

明知。小大及兼学。具載_レ西域。大小別修事。亦出_レ南海伝。而今僧統。奏云_レ件三種寺今有_レ何_レ処_レ者未_レ案_レ兩伝₍₅₀₎也。

と述べ、僧綱の奏文を批判している。

最澄が「学習大乘国」、「兼学大小国」、「但学小乗国」の三つに分類し、七十一国の国名をあげ、それぞれの国名のもとに『大唐西域記』の記事を抜粹したのを見ると、最澄がいかによく『大唐西域記』を読み、関係記事を抜きだし、そして分類整理をしたかがわかる。

最澄は、『法華秀句』巻中末において、

但無性衆生。是実義者。自_レ玄奘₍₅₁₎西遊。変風始扇。有_レ心_レ護法。誰不_レ慷慨。

と述べて、玄奘に対する批判の言をあらわにしている。これは法相宗の徳一との論争における論著のなかでの発言であって、法相宗の祖とされている玄奘を、このように最澄がみなしていたことは当然なことである。

にもかかわらず最澄が、『顯戒論』卷下、「開下示蘭若修學第一義諦六波羅蜜明拋上四十八」において、

釈迦真經。重讚蘭若。玄奘入レ山。良有所以也。求真釈子。誰不慕レ山哉。⁽⁵²⁾

と述べて、玄奘が「請入高岳表」で、

玄奘少來頗得レ專精教義。唯於四禪九定。未暇安心。今願託慮禪門。澄心定水。……若不斂迹山中不レ可成就⁽⁵³⁾。

と入山の思いを吐露したことに共鳴したのは、湯淺泰雄氏が指摘しているとおり、最澄が比叡山を修行の道場にしたという志と、まさしく一致したからであろう。⁽⁵⁴⁾

さらに最澄は、入唐求法の旅に出かけるにあたって、門弟の義真を訳語として伴いたいと要請した上掲(三)の上表文において、

沙門最澄言。最澄聞。秦國羅什。度流沙而求レ法。

唐朝玄奘。踰葱嶺以尋レ師。並皆不レ限年數。得業為レ期。是以習方言於西域。伝法藏於東土。⁽⁵⁵⁾

と述べ、ここに鳩摩羅什と玄奘の西域への求法のことについているのは、最澄が請益僧として入唐求法することが決定した時、最澄は、とくに玄奘の西域への旅に自分を比し

て、心のうちに期するものがあつたからであろう。

このように最澄は、いろいろな面で玄奘の影響を受けていた。ふたたび(四)の上表文を見てみると、さきに指摘したように、「伏惟陛下纂レ靈出レ震。撫レ運登レ樞」という文は、玄奘の「進經論等表」の「伏惟陛下纂レ靈出レ震。撫レ運登レ樞」という文を踏襲したものであるが、最澄のこの文につづく、

北蕃來朝。請賀正於毎年⁽⁵⁶⁾。東夷北首。知婦德於先年⁽⁵⁷⁾。

という記述は、延暦十四年(七九五)、同十五年、同十七年の渤海国の遣使や、延暦二十年(八〇二)の坂上田村麻呂の蝦夷征討を指している。最澄は、(六)の弘仁十年(八二五)三月十五日の上表文でも、「兩蕃帰レ化」と述べている。この方は、弘仁八、九年の渤海国の遣使と弘仁七年の夷俘への口分田の班給とがかわっているのであろう。⁽⁵⁸⁾

ところで最澄が上表文で、「北蕃來朝。……東夷北首」と述べ、また「兩蕃帰レ化」と記していることは、玄奘の『大唐西域記』に、「東夷入貢。西戒即叙」とみえることとともに玄奘の「請取梵本表」に、

伏惟陛下。則天御レ寓。光啓大猷。膺録受レ図。

弘揚正法。殊方異類。重^レ訳来朝。于閭蕃王。今帰^二聖化^一。

とあることが想起される。おそらく最澄が「北蕃来朝」云々と上表文に記したのは、玄奘の上表文に、「殊方異類。重^レ訳来朝」云々とあることに倣ったものであろう。

以上にみてきたように、最澄の上表文は、玄奘の上表文の影響を色濃く受けており、最澄の文章表現の面での受容のあり方を探る場合に、玄奘の存在を無視することができないのである。

こうした視点に立つて、あらためて最澄の願文に記されている「悠々三界。純苦無^レ安也。擾々四生。唯患不^レ樂也⁽⁶¹⁾」という著名な文を見てみると、ここにも玄奘の上表文の影響が、間接的にせよ及んでいるのではないかと思われる。

願文の「悠々三界」にはじまるこの文は、古く二宮守人氏が、『東大寺献物帳』に収められている光明皇太后の「奉^二為太上天皇。捨^二国家珍宝等^一。入^二東大寺願文^一」の書きだしに、

妄聞。悠々三界。猛火常流。杳々五道。毒網是壯。
……遂使^下擾々群生。入^中寂滅之域⁽⁶²⁾上。

とあるのと字句が酷似していることに注目した⁽⁶³⁾。確かに「悠々三界」とあり、「擾々群生」とあるのは、最澄の願文の「悠々三界」や「擾々四生」に通じ、そこを流れる思想にも共通するものが見いだされる。ちなみに光明皇太后の願文に、「伏惟先帝陛下。徳合^二乾坤^一。明並^二日月^一」とある文も、最澄の上表文(六)の「請^レ立^二大乘戒表^一」に、「伏惟弘仁元聖文武皇帝陛下。徳合^二乾坤^一。明並^二日月^一」と記されているのと同類の文であつて、最澄が、この文を『代宗朝贈司空大辨正広智三蔵和上表制集』巻第二所収の「天下寺食堂中置^二文殊上座制一首^一」に、「伏惟宝応元聖文武皇帝陛下。徳合^二乾坤^一。明並^二日月^一」とあるのにもとづいて書いたものであることは、さきに指摘したとおりである。あるいは光明皇太后のこの願文の箇所も、不空の右の表制文を典拠としていると言えるかもしれない。

それはさておいて、最澄の願文の「悠々三界」云々という文をあらためて見てみると、この箇所文は、玄奘の「請^レ入^二嵩岳一表^一」に、

凡夫闕而沈^二生死^一。由^レ是茫茫三界。俱漂^二七漏之河^一。
浩浩四生。咸溺^二十纏之浪^一。莫^レ不^二波転煙廻心迷意醉^一。

と記されている思想の影響を受けているものであることが、うかがえる。現に、『叡山大師伝』に、「年十二。投近江大国師伝燈大法師位行表所。出家修学。……令レ習^三学唯識章疏等⁶⁸⁾」とあるように、最澄は、玄奘訳の『成唯識論』などを習学することによって、僧としての道を歩みはじめたのであった。そこで唐僧玄奘と最澄の思想的な関係をあらためて問い質してみることが、次の課題となるであらう。

注

- (1) 湯浅泰雄『玄奘三蔵——はるかなる求法の旅——』、五二四頁。一九九一年一月、名著刊行会刊。
- (2) 湯浅泰雄、前掲注(1)書、五二三頁。
- (3) 高楠順次郎他監修『大正新脩大蔵經』第五十卷、史伝部二、二七三頁下—二七四頁上、および同上書第五十二卷、史伝部四、八二五頁下。
- (4) 湯浅泰雄、前掲注(1)書、五二四頁。
- (5) 比叡山専修院附属叡山学院編『伝教大師全集』卷一、一五九頁。訳文は、田村晃祐『最澄^{山家学生式}顯成論』、『日本の仏典』1、三六二頁。
- (6) 比叡山専修院附属叡山学院編、前掲注(5)書、一六〇頁。訳文は、田村晃祐、前掲注(5)書、三六四頁。

- (7) 安藤俊雄、蘭田香融校注『最澄』(『日本思想大系』4)、四一六頁上段「玄奘山に入る」の注参照。
- (8) 湯浅泰雄、前掲注(1)書、五二四頁。
- (9) 比叡山専修院附属叡山学院編、前掲注(5)書、一〇二頁。
- (10) 比叡山専修院附属叡山学院編、前掲注(5)書、一五一頁。
- (11) 比叡山専修院附属叡山学院編、前掲注(5)書、一七三頁。
- (12) 比叡山専修院附属叡山学院編、前掲注(5)書、一七五頁。
- (13) 比叡山専修院附属叡山学院編、前掲注(5)書、一七六頁。
- (14) 佐伯有清『伝教大師伝の研究』、二七八頁。
- (15) 佐伯有清、前掲注(14)書、二七九頁。
- (16) 高楠順次郎他監修、前掲注(3)書、第五十二卷、史伝部四、八一八頁下。
- (17) 高楠順次郎他監修、前掲注(16)書、八一八頁下。
- (18) 佐伯有清、前掲注(14)書、二八四頁。
- (19) 高楠順次郎他監修、前掲注(3)書、第五十卷、史伝部一、二五四頁中。
- (20) 佐伯有清、前掲注(14)書、三四九頁。
- (21) 高楠順次郎他監修、前掲注(16)書、八一九頁中。
- (22) 佐伯有清、前掲注(14)書、三五〇頁。

- (23) 高楠順次郎他監修、前掲注(16)書、八一八頁上。
 (24) 佐伯有清、前掲注(14)書、三五二頁。
 (25) 高楠順次郎他監修、前掲注(16)書、八一八頁上。
 (26) 高楠順次郎他監修、前掲注(19)書、二五六頁下。
 (27) 佐伯有清、前掲注(14)書、四五二頁。
 (28) 高楠順次郎他監修、前掲注(16)書、八三七頁中。
 (29) 比叡山專修院付属叡山学院編、前掲注(5)書、二三頁。
 (30) 安藤俊雄、蘭田香融校注、前掲注(7)書、二〇五頁頭
 注参照。
 (31) 比叡山專修院付属叡山学院編、前掲注(5)書、二三頁。
 (32) 高楠順次郎他監修、前掲注(16)書、八二五頁下、およ
 び前掲注(19)書、二七四頁上。
 (33) 安藤俊雄、蘭田香融校注、前掲注(7)書、二〇五頁、
 および四三〇頁「情猴の逸躁を制し……」の注参照。
 (34) 佐伯有清、前掲注(14)書、二六四頁。
 (35) 高楠順次郎他監修、前掲注(16)書、八二二頁下。
 (36) 佐伯有清、前掲注(14)書、二七七頁。
 (37) 高楠順次郎他監修、前掲注(16)書、八二二頁下。
 (38) 佐伯有清、前掲注(14)書、三〇二頁。
 (39) 高楠順次郎他監修、前掲注(16)書、八二〇頁中。
 (40) 高楠順次郎他監修、前掲注(16)書、八二二頁下。
 (41) 高楠順次郎他監修、前掲注(16)書、八二〇頁下。
 (42) 佐伯有清、前掲注(14)書、三〇五頁。
 (43) 高楠順次郎他監修、前掲注(16)書、八二〇頁下。
 (44) 佐伯有清、前掲注(14)書、三〇七頁および三〇九頁。
 (45) 高楠順次郎他監修、前掲注(16)書、八三〇頁下。
 (46) 高楠順次郎他監修、前掲注(16)書、八二〇頁下。
 (47) 佐伯有清、前掲注(14)書、三〇二頁。
 (48) 比叡山專修院付属叡山学院編、前掲注(5)書、三四頁。
 (49) 比叡山專修院付属叡山学院編、前掲注(5)書、三七頁。
 (50) 比叡山專修院付属叡山学院編、前掲注(5)書、五六頁。
 (51) 比叡山專修院付属叡山学院編『伝教大師全集』卷三、一
 九〇頁。
 (52) 比叡山專修院付属叡山学院編、前掲注(5)書、一六〇
 頁。
 (53) 高楠順次郎他監修、前掲注(16)書、八二五頁下。
 (54) 湯浅泰雄、前掲注(1)書、五二四頁参照。
 (55) 佐伯有清、前掲注(14)書、二九三頁。
 (56) 佐伯有清、前掲注(14)書、三五〇頁。
 (57) 佐伯有清、前掲注(14)書、三五一一三五二頁参照。
 (58) 佐伯有清、前掲注(14)書、四五二頁。
 (59) 佐伯有清、前掲注(14)書、四五四—四五五頁参照。
 (60) 高楠順次郎他監修、前掲注(16)書、八二二頁中。
 (61) 佐伯有清、前掲注(14)書、一八七頁。
 (62) 竹内理三編『寧楽遺文』下巻、四三三頁参照。
 (63) 二宮守人「伝教大師願文の研究」(『大正大学学報』第十
 二輯)、六八頁参照。
 (64) 竹内理三編、前掲注(58)書、四三三頁。

- (65) 佐伯有清、前掲注(14)書、四五二頁。
- (66) 高楠順次郎他監修、前掲注(16)書、八三七頁中。
- (67) 高楠順次郎他監修、前掲注(16)書、八二五頁中。
- (68) 佐伯有清、前掲注(14)書、一七一頁。